転移先は薬師が少ない世界でした８

登場人物紹介
レン
ソラ
ロキ
神獣である星天狼(シリウス)とフェンリルの親子。
太陽の獅子(ソル・レオン)と月の獅子(ルナ・レオン)の家族。
ユキ
シマ
ロック
リン(鈴原優衣)
神様のうっかりミスで異世界に転移した元OL。チートなスキルを活かし、薬師としてポーション屋を営んでいる。
エアハルト
『フライハイト』のリーダー。リンのよき理解者で、夫
スミレ
神獣であるクイーン・スモール・デスタイラント。
ラズ
神獣であるクラオトスライム。
ナディヤ・テールマン
『フライハイト』のメンバーで、アレクの妻。リンのよきお姉さん的な存在。
アレク
『フライハイト』のメンバーで、ナディヤの夫。エアハルトの元従者。

目次

転移先は薬師が少ない世界でした８　7
番外編　リンの薬師講座　139
番外編　異世界の〇〇　159
番外編　エアハルトさんたち主従の出会い　183
番外編　レーベルサイトSS集　197

転移先は薬師が少ない世界でした８

プロローグ

リンこと私――鈴原優衣は、かつて日本で経理の仕事をしていた。
八年くらい働いていたけれど、ある日会社が倒産してしまってハローワークへ通うことに。
そしてその帰り道、アントス様という神様のうっかりミスで、異世界――ゼーバルシュに落ちてしまったのだ。
ゼーバルシュは魔神族をはじめとして、ドラゴン族や獣人族、ドワーフやエルフ、人族など多種多様な種族がいる世界で、日本とは全く異なる文化を形成している。
そんな異世界に突然放り込まれて、元の世界にはもう戻れないということを聞いた私は、あまりに衝撃的な出来事に驚き、不安でいっぱいになった。
孤児で、元の世界にも家族がいないとはいえ、誰も知り合いがいないこの世界でやっていけるのだろうか……
そんなことを考えている私を慰め、支えてくれたのは、日本を担当している神様であるツクヨミ様だった。異世界に落ちる原因となったアントス様も一発殴らせてくれて……
神様たちのサポートの元、お詫びに授かったチートな調薬スキルを活かし、私は『薬師・リン』としてポーション屋を営み、新たな生活を始めることになったのだった。

異世界に来てからは、私が想像していなかったような出来事がたくさんあった。
まずは、従魔たちの存在だ。
クラオトスライムのラズに、クイーン・スモール・デスタイラントのスミレ。親子である星天狼のロキとフェンリルのロック。同じく太陽の獅子のレンとユキ、月の獅子のシマとソラという四匹の家族、従魔たちの眷属となった元ココッコたち。
みんなとても可愛くて頼もしい私の家族だ。
強くて優しくて、私にはもったいないような従魔たちと出会えたことは、本当に幸せな出来事だった。
他にも、忘れられない出会いはたくさんある。
私が入っている『フライハイト』のメンバーに、ドラゴン族のヨシキさんがリーダーを務める『アーミーズ』のみなさん。
『フライハイト』のみんなは、私の異世界でのはじめての仲間で、心から信頼できる人たち。

『アーミーズ』のみなさんは転生者で、日本にいたとき私の側にいた関係者や知り合いという、世間は狭かった！　的な人たちばかりだ。

なによりも、『フライハイト』のリーダーであるエアハルトさんは、異世界に来たばかりの私を助けてくれた恩人であり、大事な婚約者！

日本にいたときには全く考えられなかったことが起きて、嬉しいやら恥ずかしいやら……

そんな中、ガウティーノ侯爵家の領地に行って、ガウティーノ侯爵ご夫妻とダンジョンに潜ったりもしたし、宮廷医師のマルクさんと前世は私がお世話になった施設の院長先生であるハインツさんと森に散策に出かけたりもした。

森で柚子（ゆず）とレモンの中間のような味がする果物――ユーレモの有効活用法を発見して、マルクさんに丸投げしたこともあったなあ。

それから、友人たちがどんどん結婚していく中で、とうとう私もエアハルトさんと結婚――この世界の言い方だと婚姻をしました！

準備には大変なこともあったけれど、みんなが協力してくれて思い出深い一日になった。

なんと、ウェディングドレスの布や髪飾りなどは、私に内緒で従魔たちと眷属たちが集めてくれたのだ！　それを聞いたときはとても嬉しかった。

私に内緒だなんて、可愛いでしょう？

それに、一応招待状を出したものの、とても忙しい方たちだから来てくれないだろなあと思っていた、私の後ろ盾でもある宰相様と王様が、お忍びで来てくださって唖然とした。

それに加えて式が終わるタイミングでアントス様の像が光り、そこから祝福の言葉をもらったりもしたよ。

予想外なことばかりだけど、とっても嬉しかった。

本当にいろんなことがあったけど、なんだかんだと異世界に来てから約三年が経ち、みんなとの素敵な出会いのおかげで楽しく充実した日々を送っている。

もちろんそれは、結婚したことも含むのだ。

日本にいたころは、施設にいた当時のあれこれがあって、結婚できるだなんて考えてもいなかったし、諦めてもいた。

このまま枯れた女か喪女（もじょ）となり、一生独身として過ごすんだろうなあ……と、漠然とした思いを抱えてた。

だけど、アントス様のせいでこの世界に落ちて、ツクヨミ様をはじめとした日本の八百万の神々の応援（？）もあって、幸せな生活を送ることができた。

その縁（えにし）を繋いでくれたのは顔も知らない亡き両親であり、ご先祖様でもある私の守護霊のおか

げだ。
いつか、守護をしてくれている人にも会いたいな。
そんなことを考えていたわけだけど、結果的に幸せになれました！　といろんな人に報告できるのがとにかく嬉しい。

第一章　出発準備

エアハルトさんと結婚し、嬉し恥ずかしめくるめく初夜を明かした、二日目の朝。
「おはよう……優衣」
「お、おはようございます、エアハルトさん」
エアハルトさんの腕の中で目覚め、朝っぱらから耳元で囁かれました！
破壊力抜群な美声です！
照れて私の顔が火照っているとわかっていながら、朝から唇にキスしてくるとか……！
ニヤリと笑っているんだから、エアハルトさんは確信犯だと思う。
くそう……イケメンでイケボめ！
とはいっても、嬉しくないわけはなく。
朝から散々キスをして、ギシギシいう体に鞭を打ちながら、いそいそとベッドから起き出して着替える。

あ～、エアハルトさんにがっつかれたから足腰が痛い！
あんなに体力バカだとは思わなかった！
湯舟に使って体をほぐしたい～！
なんて思いつつ、すぐに食堂に向かった。
昨日から拠点でご飯を食べているからね～。
もちろんアレクさんとナディさんご夫婦と一緒だ。
四人でわいわい言いながらご飯を作り、みんなで食べる。全員の従魔たちと、私には眷属たちもいるから、作るのが大変だ。
だけど、誰も料理人を雇おうとは言わない。
エアハルトさんが騎士（きし）だったときは、身分上は貴族だったから料理人を雇うのは当然だったけど、今は全員が平民となり、冒険者として暮らしている。平民の……冒険者としての暮らしは、料理人だけでなく使用人を雇う必要がない。
貴族は、人を雇うことも仕事に含まれるものだからね。
これはエアハルトさんが言っていたんだけど、平民の私たちが料理人を雇うのは違うからと、ララさんとルルさん、ハンスさんが自分の店を出店して拠点を出ていったタイミングで、もう料理人を雇わないと決めていたんだって。

それに、元は貴族だったエアハルトさんたちも、徐々に料理を覚えて自分たちで様々なことができるようになったから、専門の人々の助けは必要がないのだ。
エアハルトさんたちは、料理人を雇わないと決断した理由は、自分たちで作れることが一番大きいとも言っていたなあ。
まだまだレパートリーは少ないけど、私や母、『アーミーズ』のみんなに教わったりして、作れる料理を増やしている。
失敗をすることもあるけれど、今はそれすらも楽しいんだと、エアハルトさんもアレクさんもナディさんも、そう言って笑うのだ。
楽しく料理するのはいいことだよねと、両親と一緒に微笑んだのは内緒。
ポーション屋を営んでいる私と違ってエアハルトさんたちはダンジョンに潜る機会が多いから、拠点に私と私の従魔たちと眷属たちしかいなくなる時もある。
そんな時は、私一人で今まで通り料理をすれば問題ないし、場合によっては今まで通り、店の二階に住めばいいだけの話だしね。
それはともかく。
私達四人はご飯を食べながら、新婚旅行について話しあっているのだ。
この世界では、新婚夫婦には蜜月期間というものが与えられる。

蜜月期間は約二カ月ほどで、その間は仕事を休むことも認められているのだ。
普段は、通りのスケジュールやルールに従って店を運営しているから、私のように一人で店を営んでいる人たちは、長期のお休みをもらうことが難しい。
だからこそ、多くの人たちはこの期間に新婚旅行として遠い場所に旅行に行くことが多いんだって！
貯金に余裕がない人はがっつり休まないことが多いらしいんだけど、私たちの場合はまったく問題ないので、ゆっくり休ませていただきます！
ということで私達も、新婚旅行を兼ねてどこに旅行に行くか結婚前からずっと話し合っていた。
ちなみに、話し合いにアレクさんとナディさんが加わっているのは、私たちが結婚するのを待って、二人が蜜月期間をずらしていたからだ。
アレクさんとナディさんは私たちよりも先に結婚していたから、もちろん先に蜜月期間に入って二人で旅行に行くこともできたんだけど……
できれば四人で、そして従魔たちと一緒に、『フライハイト』としても旅をしたかったんだって。
エアハルトさんに忠誠を誓っているアレクさんらしいなあ。今はあれこれ言える親友になったみたいだし。

それに、私とは滅多に行動できないこともあって、ナディさんが「リンとも一緒に行きたいですわ！」と言ってくれたそうで……

それなら二組の夫婦で蜜月期間に新婚旅行に行こうということになったわけ。

そして肝心の目的地だけど、これがなかなか決まらない。

「リンの世界の蜜月期間は、どういうことをしていましたの？」

ナディさんがキラキラした瞳を向けて尋ねてきた。

「私の世界というか、私がいた国だと、蜜月期間は長くても十日くらいです。一般的だと、三日くらいですかね？」

「「短い！」」

「こちらだとそう感じるかもですね～」

三人共、私の想像以上に驚いた表情をしている。

二ヶ月もあったら、そりゃあ短く感じるよね。

とはいえ、地球でも国によって期間は様々だったから、文化の違いがあるのだろうと伝える。

その上で、新婚旅行はどこに行ったかといえば。

「仕事の関係で長期間は休めない人たちが多かったので、自国内にある観光地に行く人多かったと思います」

「まあ、観光地、ですの？」

「はい。温泉だったり、山岳地帯だったり……あとは、他の県――領地に行って特産物を食べたりですね。しかも、私のいた国の観光地にはある程度の観光名所があったり、動物園や水族館などの施設があったりしたんです。他にも現地の特産品の買い物をして、家族や友達へのお土産にしたりと、いろいろと楽しめる要素がありましたし」

「「ほう～」」

感心しきりな三人。

エアハルトさんに動物園と水族館とはなにかと聞かれたので、きちんと説明した。

動物園と水族館の中には遊園地と一緒になっているところもあったことを伝えたら、ますます興味をもったみたい。

もちろん、遊園地の説明もしました！

遊園地についてどうやって説明したらわかってもらえるか、苦労したけどね。

移動手段についても聞かれたから、車、電車、飛行機と船の説明もした。

「リンのいた国には、さまざまな移動手段があるんだな」

エアハルトさんが感心した様子で呟く。

「そうですね。蜜月期間が長い人たちの中には、ハワイ――海が綺麗な他国に向かう人たちも多

かったので、飛行機は必須の交通手段でした」
日本は島国だから、他国に行くには飛行機が必須だったからね。他にも豪華客船という世界中を回っている船の話もしたよ。
お土産は、その地の特産物やその土地らしいものを買ったりもすると話す。
「私のいた国の新婚旅行の目的地として、一番イメージに近いのは、フルドの町ですかね？　温泉地の雰囲気は、あんな感じでした」
「「なるほど」」
フルドの例を出すと三人共納得した。
そういった話をしていると、アレクさんがアイデクセは内陸に位置しているので、海に面していないという話をしてきた。確かに、私もこの世界に来てから海を見ていない。
それを踏まえて、ナディさんとエアハルトさんからも地上の海産物が食べたいという意見と、本物の海が見たいとの意見が出た。
せっかくなので、新婚旅行で海のある国――ドラールに行くことに。
目的地の候補となる国は何か国かあったのだけど、西か東、南に行くかによって移動日数が変わる。
いくら長い蜜月期間とはいえ、移動時間などを考えると現地でゆっくりする時間は、そう長くはとれない。
海がある他国と比べた結果、ドラールが一番近いことがわかったので、ドラールへ行くことを決めたのだ。
エアハルトさんと私は、二人でドラールに行ってみたいねと話していたことがあったので、とても嬉しかった。
もちろん、季節的にも観光がたくさんできそうな国や、結婚前に周りの人たちにどこの国がいいかとオススメを聞いて回った結果教えてもらった国などを含め、地図を眺めてあれこれ意見を出し合った。
最終的に、距離が一番近いドラールと観光地が多いもうひとつの国で迷ったのだけど……
でも結局、『アーミーズ』の本当の拠点であり、転生者が多数いるという噂のドラールに行きたいと、我儘を言わせてもらったのだ。
だって、『アーミーズ』の拠点ではダンジョン産ではなく、自家製の味噌と醤油、豆腐を作っていると聞いたから、どうしてもこの目で見てみたかったのだ。
しかも、ドラール全土に広まっているんだって。
それに、マドカさんの領地には海苔があると聞いたしね。
念願の海苔！　ぜひとも大量に欲しいところ。

そんなわけで、ドラール行きが決定し、四人で旅の方法をどうするかや、いつ出発するかということについて話し合っているんだけど……

「無事目的地が決まったことだし、できる限り早く出発したいと思うんだが……ドラールまでのルートはどうする？」

エアハルトさんがみんなに意見を聞く。

「馬車ですと、時間がかかってしまいますしね」

「そうですわね。それに、長時間、馬車に乗るのは……」

「だよな。やっぱ、空の旅しかないのか……」

エアハルトさんにアレクさん、ナディさんは渋い表情をしている。

それにしても、空の旅ってどういうことだろう……？

『フライハイト』で相談していてもなかなか決まらなかったので、それならばドラールからアイデクセまで来たヨシキさんたち『アーミーズ』に意見を聞こうということになり、早速どうやって往復したのかを含め、アイデクセからドラールまでの道のりを聞いた。

ヨシキさんたちはアイデクセまでは基本的に馬車で来たそうだ。

だけど、途中で空の旅で移動距離を稼いだから、一か月かからずに到着したらしい。

まだ赤ちゃんだったリョウくんがいたのに、凄いよね。

アイデクセからドラールまで、空だと一直線に行けるから七日から十日程度、馬車で急ぎだと一ヶ月から一ヶ月半、ゆっくりで一ヶ月半から二ヶ月かかるという。

馬車だと山や森を迂回(うかい)して三つの国を跨ぎ、ぐるーっと回ることになるから、どうしても時間がかかるそう。

まあ、空だと一直線とはいえ、当然のことながら国境を勝手に跨ぐわけにはいかない。

なので、空の旅といえど国境の近くになったら地面に下り、きちんと出入国の検問を受けてからまた空の旅へと戻る形になるんだって。

しっかり考えられているんだね！

普通に旅をするんじゃなくていわば新婚旅行だから、そんなに時間はかけていられないし、蜜月も二か月しかない。

できればドラールでは一週間以上ゆっくりしたいということで、空から行くことになった。

ずっと気になっていた空の旅だけど……なんと従魔たちに力を借りるということらしい！

全員、大型な鳥類の従魔がいるからね。

飛行機みたいな乗り物があるのかと思っていたから驚きました！

出発は明日の早朝の予定。

それまでに旅の準備をしないといけないんだけど、ぶっちゃけるとダンジョンに潜る準備とあ

まり変わらない。せいぜい、数着の着替えを持っていくくらいしかないのだ。
水は魔法で賄えるし、食料は途中の町で買ったり、魔物を狩ればいい。
着替えだっていざとなったら途中の町で買うことができる。【無限収納（インベントリ）】にしまってしまえば旅行鞄もいらないし、歩くときの鞄さえあればいいから、ほぼ手ぶら。
その鞄だって、【無限収納（インベントリ）】になっているマジックバッグだしね。
そう考えると……ねぇ？
行動力のあるエアハルトさんたちからすれば、無問題なわけで。
「ふむ……よくよく考えると、今から出発できるな……」
「そうですね。出発いたしますか？」
「わたくしはそれでもいいですわ」
「私もです」
「なら、さっさと準備して出発しよう」
「「わかりました」」
「あ、私はママに声をかけてきますね」
というわけで、明日の出発が急遽今日になりました！
大慌てで母のところに行き、店番を頼む。母は急ねぇ、なんて苦笑している。

「リン、神酒（ソーマ）とハイパー系、万能薬の在庫を見てちょうだい」
「わかりました」
母は神酒（ソーマ）以外のポーションを作れるからね。ハイパー系はまだ失敗することが多いみたいだけど、それでも作れているんだから凄い。
もちろん、私と母の作ったポーションではレベル差があるから、確実にレベル五が作れるハイ系以外は店には出していない。
店内に貼ってある鑑定書には販売しているポーションのレベルが記載されているし、認定証か許可証に書かれているレベル以外のものは販売できない。
無許可のポーションを販売すると詐欺として告発され、営業停止や廃業に追い込まれてしまうからだ。
それをわかっているから、母もレベル五以外のものは店には出さないし、出せないものは『アーミーズ』が使用している。
ちなみに、薬師が廃業になる場合は、そういうことをやらかすか、犯罪に走った人ばかりらしいしね。
それはともかく、ハイ系は母もレベル五が安定して作れるようになったから、店に出しても問題ない。

母に言われたポーション類全部の在庫を確認し、この日のためにちまちまと作り貯めていた神酒（ソーマ）を千本と、万能薬とハイパー系を五千本ずつ、ライゾウさんが作ってくれた【無限収納（インベントリ）】になっているマジックバッグの中に入れる。

もちろん、別々に収納しているのだ。

「ママ、ハイ系以外は在庫を出しておいたよ」

「ありがとう。いくつあるの？」

そう聞かれたから出した数を言うと、「多すぎ！」って呆れられてしまった。

「そうは言うけど、もし不測の事態があったらどうするんですか？」

「それは……」

「念のためなので、持っていてください。もし神酒（ソーマ）が足りないようなら、ここにもあと千本ありますから」

「リン……」

カウンターの下に【無限収納（インベントリ）】になっているマジックバッグがあるんだけど、そこにも神酒（ソーマ）が千本あると教えたら、愕然とした顔をしていた。

他にも、万能薬とハイパー系がまだ五千本ずつあるって言ったら、どんな顔をするんだろう……？

それは父に言うことにして、もし足りないって相談されたら出してと伝えておこう。

店のことを母にお願いし、その足で向かいにある父の診療所に行く。

カウンターの下にあるポーションの話をすると、苦笑しながらも「わかった」と頷いてくれた。

これから出発することを伝えると「急だな」と言われたけど、それ以上なにも言われることはなかった。

「気をつけて行っておいで。職人支部のみんなにも、よろしく伝えてくれ」

「はい。いってきます！　リョウくんも、お土産を期待しててね！」

「あーい！　ねーね、いてらーちゃい」

「いってきます！」

リョウくんの紅葉（もみじ）の手を握ってからお土産の約束をし、バイバイしてから診療所を出る。

私がいない間は、両親が店の二階に住んでくれるそうだ。

店があるのに中に誰もいないと、泥棒（どろぼう）に入られることがあるからなんだって。

しかも、店主である私がいないというのは一番まずいことだという。どれだけ優秀な防犯機能があっても、泥棒（どろぼう）が入りやすい家だと目をつけて、精力的に狙ってくるからだそうだ。

普段は私や従魔たちがいるから、夜に外出していたり、ダンジョンに潜ったりしていても問題なかったけど、さすがに二か月も留守にするのはよろしくないらしい。

だからこそ、両親とリョウくんが期間限定で住んでくれることになった。
父の診療所にはお弟子さんが寝泊まりしているから安心していられるけど、私は弟子をとっていないからね。
だから、まったくの無人になってしまうことを考えるとよろしくない、ってことみたい。
弟子がいないとこういう弊害もあるんだね。
帰ってきたらになるけど、誰か弟子をとったほうがいいのかなあ……
それはゆくゆく考えるとして、しばらくはいいか。
従魔たちに相談して、私が拠点に住むようになったら従魔たちに巡回してもらうのもいいかもしれないし。
もしくは週に一回、エアハルトさんと一緒に店の方に泊まってもいいしね。
それはともかく、両親には神様たちにいただいた緑茶類も自由に飲んでいいと言ってあるから、私がいない間は大丈夫だろう。もしお茶がなくなったら、筒ごと神棚にお供えしてと言ってあるし。
当然のことながら、神棚のお供えもお願いしてあるので問題ない。
バタバタしつつ診療所を出たあとは、ゴルドさんや隣の道具屋さんにも新婚旅行でしばらく店にいないからと話し、慌てて拠点に戻る。

「すみません、遅くなりました！」
「大丈夫だ。俺たちも今準備が終わって、挨拶してきたところだから」
「よかった！　鞄を取ってきますね」
「慌てて転ぶなよ？」
「ぶー！　転びません！」
フラグを立てるようなことを言わないでよ、エアハルトさん！
まあ、転ぶこともなく、ロキがリュックを銜えて持ってきてくれたから、助かった！
外に出ると、エアハルトさんが建物を一周して戻ってくる。
玄関の鍵を閉めたあとでなにか呟くと、一瞬半透明の壁のようなものが出たあとで建物が光り、消えた。
今光ったのは、長期間家を空けるときに使う、防犯結界なんだって。魔法ではなく、複数の魔道具を使用して、結界を作っているとのこと。
解除できるのは家主であるエアハルトさんとアレクさんのみで、泥棒が入ろうと扉に手をかけると、ビリっと痺れて通りに弾き出されると同時に、騎士の詰め所に連絡が行くようになっているという。
店が使っているような防犯機能と同じものらしい。

ファンタジーだなあ……

カギ閉めなどが終わると従魔たちを引き連れて門まで行き、挨拶をして出た。

しばらく歩いてから誰もいないことを確認し、三人はそれぞれの飛べる従魔たちにのり、他の従魔たちは小さくなって彼らの前にある籠の中に入る。

というかね……いつの間に小さくなれるスキルを手に入れたんだろう？

神獣じゃなくても取得できるって知らなかったよ……

多分、ロキたちが教えたんだろうけどさ。

そして私だけど、グリフォンのリュイ、ガルーダのカーラ、シームルグのラン、ズーのベルデとアビー、フレスベルグのペイルの六羽が、休憩のたびに交代で飛ぶことに。

コカトリスのロシュは飛べないわけじゃないけどそっちに特化しているわけじゃないし、サンダーバードのルアンとクインだと私をのせて飛ぶには小さすぎるという理由で、この六羽になったのだ。

飛ぶ順番でかなり揉めていたんだけど、決着してよかったよ。

決着方法？　あみだくじにしましたが、なにか。

もちろん、他の従魔たちは小さくなって籠に入っているし、ロシュは籠、それ以外の他の飛べる子たちは私たちの護衛を兼ねて、空を飛んで行くのだ。

その護衛として飛んでいくルアンとクインの頭の上には、なぜかラズとスミレが陣取っている。
「準備はいいか？　……よし。出発」
上空は寒いからともこもこのコートを着こみ、エアハルトさんの合図で全羽が空を飛び立つ。
途中にある町にも宿泊するって言っていたし、観光もするつもり。
そんな町やドラールはどんなところなのかな？　楽しみ！

第二章　空の旅と国境の町・ガスト

拠点をでて、南西に向かって飛ぶ私たち。
今は国境を目指している。
本来なら国境に到着するまで、馬車だと三日かかるそうだ。というのも、道中に複数の森があって、馬車だと整備された街道を通るために迂回しないといけないから。
でも今は、森を迂回しないで真っ直ぐその上空を飛んでいるからか、もうじき着きそうだとエアハルトさんが教えてくれる。
飛び始めてまだ一時間弱だから、想像以上に速いスピードで飛んでいるみたいだ。
とはいえ、風圧で飛ばされないよう結界を張っているらしく、移動はかなり快適だ。上空にいるから寒いけど、もこもこコートがいい仕事をしていて暖かい。
上空から地上を見下ろしてみる。
森と草原の間にあるのは、土がむき出しの街道だ。

小さな点の塊が動いているから、誰かが馬車で移動しているんだろう。行列のようになっているから、大きな商会の隊商（キャラバン）かもしれない。
森自体はあちこちに点在していて、その合間に川も見える。
それに、沼や湖があるのか、ところどころ地面が輝いていた。太陽の光を浴びて、水面に反射しているんだろう。
ゆるく、あるいは大きく蛇行している川は、上から見るとヘビのよう。
それを見て、四国に龍の形をした川がある！　とＳＮＳに投稿されていた写真を思い出した。
曲がりくねった龍の尾と胴体、手足の部分が吉野川、頭部を早明浦湖（さめうらこ）だと説明されていたっけ。
眼下に見える川は、それに近い形だ。
頭にあたる部分はないけどね。
うしろを振り返れば冠雪（かんせつ）した高い山脈が見え、そのままぐるっと見回せば、頂上だけ冠雪（かんせつ）している山に、緑一色の山。
山脈の辺りに黒い塊が空を移動しているのが見えた。たぶん空を飛ぶ魔物がいるんだろうと推測することができる。
――本当に、この世界は綺麗だ。
まるで、空撮をした動画をテレビで見ているみたい。

そんな感動を覚えつつ、移動を続ける。
見上げればどこまでも続く青い空がグラデーションを作り、それを彩るように雲が浮かぶ。白い雲もあれば、遠くには薄いグレーの雲も見える。
グレーっぽい雲の下は雨かなあ……なんて考えている間も、着々と目的に近づいていて……
眼下に映る景色は、森を飛び越え、川や草原を通り越して、また森に入っていった。
自然が豊かな世界だと改めて感じるとともに、魔物もいる世界なんだなあ……って実感する。
もうすっかり慣れてしまったけれど、この世界には様々の種族が住んでいるんだもんね。
まだまだ、私が見たことのない景色がたくさんあって、会ったことのない種族の人々がたくさんいるんだろう。
そんなことを考えていたら、魔物が襲いかかってきた。
きっと空を飛ぶ魔物もいるんだろうな……と推測はしていたけど、本当にいるんだね。
地上同様に野生のワイバーンやサンダーバード、レッサードラゴンが襲ってきたよ……
まあ、護衛をしているみんなが【風魔法】や【雷魔法】で呆気なく倒している。
スパっと切れたりピカって光って稲妻（いなづま）が走ったあと、どんどん魔物が落下していく。私たちは落下した魔物を掴んで、スミレの糸で捕獲してマジックバッグの中にしまっていった。
それらは休憩のときに解体。もしくは、ギルドに依頼があったら依頼票を剥がしてそのまま持

ち込み、達成扱いにしてもらうんだって。
旅の道中とはいっても、効率的に動かないとね！
戦闘を繰り返しているうちに、遠くのほうに白い建造物が見えてきた。
万里の長城ほどではないけど、同じくらいに長い壁と、それよりも先にある建物群だ。
「お、見えてきた。手前にあるのがアイデクセ国の隣国となるベイエレン国との国境、その先が国境の町、ガストだ」
エアハルトさんが教えてくれる。
「ガスト……」
国境のかなり先に、おおきな石垣の円形があった。
そこから四方に街道が見えることから、重要な場所でもあるんだろう。
たしか、交易が盛んな町だと言っていた気がする。
ただ、名前を聞いて某ファミレスを思い出してしまって、吹き出してしまったのはしょうがない。エアハルトさんたち三人に不思議そうな顔をされたから、前の世界にあった食堂と同じ名前だと言うと、同じように吹き出していたっけ。
だよね～、そんな偶然があったら吹き出すよね～。
『フライハイト』のメンバーは、私が〝渡り人〟だと知っているからね。

最近は、四人や『アーミーズ』のメンバーがいる場合に限り、日本のことも話すようになった。
もちろん、周囲に誰もいないことが前提だけど。
飛んだまま国境を越えるわけにはいかないので、国境を超える手前で地上に降りる。
移動中、籠に入ってもらっていた従魔たちにはそのまま籠に入ってもらっていた。
私たちが乗ってきた従魔たちを引きつつ、従魔たちがいる人専用の門に行くと、すぐに順番が来る。
「ほう？　飛べる従魔とは珍しいな」
門番が笑顔で声をかけてきた。
「だろう？　おかげで旅が快適だよ」
「それは羨ましい。よし、いいぞ。次」
タグを見せてから白水晶に触るエアハルトさん。次にアレクさん、ナディさんと続き、最後に私の番になった。
門番は私のタグを見てギョッとしたあと、さらに従魔たちが上から見ていたことにもギョッとする。そしてなにかを思い出したのか、目を輝かせる。
「は……ははは……。もしかして……ローレンス様の怪我を治した薬師って君か？」
「はい」

なにかと思ったら、グレイさんのことか！
「おお、ありがとう！　俺が礼を言うのは違うかもしれんが、やっぱり尊敬している殿下の怪我は心配だったからな。まあ、今は王子じゃないが」
「そうですね」
「まあ、なんだ。とにかくありがとう。よき旅を。そしてアントス様のご加護がありますように」
「ありがとうございます」
にっこり笑ってタグを返してくれる門番のお兄さん。
……もう加護があります、とは、さすがに言えなかった。
それにしてもグレイさん、本当にいろんな人に慕われているんだね。
さすがだな～と嬉しくなるよ。
無事に国境を越えたということで、従魔たちには役割を交代してもらう。
飛ぶ子が交代するので、私は籠をリュイからベルデに変え、そのまま跨る。
「よろしくね、ベルデ」
《任せて、ご主人様！》
ベルテは気合十分といった様子だ。

「お待たせしました」
「よし。あと少しで国境の町・ガストだから、その手前まで飛んで行く」
エアハルトさんの合図で飛び立ち、そのままガストの近くまで飛ぶ。
まあ、国境からガストまですごく近い距離だったから、すぐに下りたんだけどね。なので、次に飛ぶときもベルデの担当のままだ。
門で白水晶に触り、中へと入る。
ここでも門番にギョッとされたけど、それは他のみんなの従魔たちも同じだった。
まあ、私のほうがヤバイ従魔たちと眷属たちだけど、三人の従魔たちもヤバイのがいるものね。
神獣やそれに次ぐ実力の魔物のオンパレードなんだから、何も知らない人にギョッとされるのは当たり前か。
ガストには食料調達に寄っただけなので、それほど長く滞在することはなく、すぐに出発することになる。
ガストはとても賑やかな町だけど、特別な観光地があるわけじゃないから、ドラールで過ごす時間のために早めに出るのだ。
町に無事に入ったところで、早速みんなで大きな通りを歩いていく。
まだ七時前だからなのか、朝市がとても賑わっている。

もちろん、従魔たちは通行の邪魔にならないようみんな小さくなっているんだけど……
私はさすがに全員を肩や腕にとまらせることはできないから、レンとシマだけが大きくなり、他の従魔たちは彼らの上にいた。
鳥の子たちは私とレンとシマに分散し、ロキとソラがレンの上、ロックとユキがシマの上だ。ラズとスミレは私の両肩にいる。
レンとシマは護衛も兼ねているので、私の両隣を歩いている。
初めての他国、しかも交易の拠点ともいえるべき場所。
だからなのか、アイデクセの王都で見たことがある種族の人もいれば、初めて見る種族や服装の人もいる。
王都ではあまり見なかった、背中に翼が生えている人たちもたくさんいて、その翼の色もさまざまだ。白と黒、茶色に灰色の人もいれば、全体的には茶色や黒だけど、先端が真っ白の人もいた。
どこの国の人なのかな。
興味はあるがあまりにもジロジロ見るのは失礼だと思い、それ以降は見ることをやめた。
他にも、キツネの耳と尻尾(しっぽ)がある商人の格好をした人や、額に小さな角が生えていて、体の大きな冒険者もいたよ。

あとでこっそりとエアハルトさんに聞いたら、鬼神族という、西大陸にいる魔神族じゃないかと言っていた。
なるほど、一口に魔神族といっても、大陸によって違うってことなんだろう。
そういった人たちもいたし、初めての他国ということで珍しさから私も従魔たちも、きょろきょろと周囲を見回すので忙しい。
三人は落ち着いているから、来たことがあるのかな。そう思って聞いてみたら、一度だけだけど家族と来たことがあるんだって。
なんでもガストの町から北に向かうと湖があって、そこが避暑地(ひしょち)になっているという。
王都の近くにある湖とは違うもので、魔物もランクの低いものしかいないそうだ。
それもあり、アイデクセの貴族たちに人気の避暑地(ひしょち)らしい。
まあ、なにもないからか一回行けばいいと思ったのか、あるいは仕事が忙しかったのかわからないけど、一回訪れたきり三人は再訪していないみたいだけど。
そんな話をしているうちに、多くの朝市が立つ商店街に着く。
パッと見ただけでも、いろんな種類の野菜や肉、魚を見つけることができた。
さすがに果物は少ないけど、ダンジョン産と書かれた看板のところには、バナナとみかん、リンゴの絵が描かれていて、私がもたらした情報がここまで浸透しているんだなあと嬉しくなった。

「さて、食材を探すか」
「そうですね。肉は途中でも狩れますから、野菜や果物でしょうか」
「湖で獲れる魚と、調味料も欲しいですわ」
「私は香辛料もあったほうがいいと思います」
「わかった。じゃあ、デートがてらそれぞれの夫婦で行動しよう」
エアハルトさんがいきなりそんな提案をしてきたよ!?
しかも、アレクさんとナディさんも、嬉しそうに頷いてるし！
ま、まあ、気持ちはわかるから私も頷く。
「いいですね。集合時間はどうしますか？」
「はっきりとは決めないで、一周したらここに戻ってくることにしようか」
「わかりました。ナディ、行きましょうか」
「ええ！　どのような食材や調味料があるか、楽しみですわ！」
嬉しそうなアレクさんとナディさんが微笑ましい。
「俺たちだけじゃなく、従魔たちのぶんも計算にいれろよ？」
「わかっております」
それでは、と左右に分かれて行動開始！

「それじゃあ、優衣。順番に見て行こう」
「はーい」
プチデートだ～！　と内心ではしゃぎつつ、道路の両脇にある食材や調味料を物色する。
絶対に必要な調味料は持ってきているけど、それ程たくさんは持ってきていない。
道中でも買えるだろうと思ったからね。
ただし、味噌と醤油がドラールとアイデクセ以外にないと困るので、大量に持っていることは内緒。
出発前に、ドラールに着いたら手作りの味噌と醤油、お豆腐を買うつもりだとヨシキさんに話したら、紹介状を書いてくれた。
ドラールにはヨシキさんの仲間が残っていて、『アーミーズ職人支部』として活動しているんだとか。
……いろいろと突っ込んでみたい。
その紹介状を渡せば、味噌と醤油、お豆腐を融通してくれるかもしれないんだって。
融通してくれたら嬉しいな！
そんな調味料事情はともかく。
炒め物やサラダに使う野菜。

そろそろ肌寒いから、シチューなどの鍋やスープに使うもの。
他にも湖で獲れた魚とカニとエビ、塩と砂糖を基本にした調味料とスパイスを買いながら、エアハルトさんと町を散策する。
鮭に似た姿で一メートル以上ある赤身の魚に、サバっぽい見た目で五十センチ前後の青魚。
まんまアンコウという名前の白身の切り身は、日本にいるときにスーパーで見た量の五倍はある。
それだけで、元の魚もとても大きいんだろうと想像できた。
あとは、伊勢海老（いせえび）の倍近いサイズの車エビとボタンエビサイズのバナメイエビ、ゼーバルシュではスパイダークラブと呼ばれているタカアシガニというか、タラバガニっぽいものをそれぞれ箱買いしてしまった。
特にスパイダークラブは見た目が真っ黒で脚が長いからなのか、誰も買っていなかったんだよね。
もちろん、茹でてカットされているものは買っていくんだけど、丸ごとの姿のものはだ～れも買わないという不思議。
解体が面倒なのかもしれないと思った瞬間だった。
とはいえ、はしゃぐ従魔たちと眷属たちとは違い、隣にいるエアハルトさんは若干呆れている

雰囲気を醸し出しているわけで。
「優衣、買い過ぎじゃないか？」
「そうでもないですよ？　エアハルトさんたちはともかく、私の従魔たちと眷属たちは御覧の通りだし……」
「まあな……」
呆れた声音で言われたけど、うちは大所帯なうえに大型の子が多い。
というか、ラズとスミレ以外はほぼ大型だ。
食材によっては箱買いしても、一食分でなくなってしまうこともあるんだよねぇ。みんなすごくよく食べるから。
だからこそ、私たちしか踏破していないダンジョンの階層に行くと、根こそぎ殲滅して帰ってくるのだ。他の人たちのために残す必要がないから。
ダンジョンによりけりだけど、ボス部屋以外の魔物の復活時間も、最長で二時間も待っていれば復活（リポップ）するから、その間にゆっくり採取することもできたりする。
それもこれも、従魔たちと眷属たちがいるからこそだし、主人である私としては、みんなに好きなものをたくさん食べてほしいとも思ってる。
だから、今回もたくさん食材を買うのです！

そんな話をしたら、エアハルトさんには妙に納得されてしまった。
エアハルトさんの従魔たちの成長具合はどうかなどの話をしつつ、あちこちのお店で箱買いしていたら、いつの間にか一周していた。
すぐアレクさんとナディさんとも合流したので、みんなで歩き始める。
途中にあった屋台でワイバーンのお肉の串焼きが売っていたのでそれを朝食代わりに買い、食べ歩き。
ワイバーンのお肉は珍しいものじゃないけど、こうやって異国の地で食べ歩くといつもよりおいしく感じるから不思議だ。
そして、この町にもスリはいるみたいだけど、温泉の町フルドのように、組織的に動いている様子はないみたい。
それでも現行犯で騎士（きし）に引き渡されているところを見たから、まったくいないってわけじゃないんだろう。
こういう人ってどこにでもいるみたいだしね……盗賊と同じように。
私たちはスリに遭うこともなく、買い物を終えた。
そのまま町を出るのかと思ったら、一度冒険者ギルドに寄るんだって。
なにをするのかと思ってエアハルトさんに聞いたら、ワイバーンの串焼きが売られているのを

見て、ワイバーンの納品の依頼があるかもしれないと考えたんだって。
もし依頼があるなら、来るまでに狩ったワイバーンを納品することにしたみたい。
移動中に五体くらい連続で襲われたもんね……
ワイバーンは解体が大変だって言っていたから、そのままギルドに納品するほうが楽っていうのもあるんだろう。
町の人に聞きながらギルドまで行く。
中に入ると冒険者たちに一斉に見られたけど、従魔たちがいることに気づいてからは、サッと視線を逸らしていた。
「ああ、こちらにございますね」
「お、数もちょうどあるな」
「こちらにはレッサードラゴンとサンダーバードもありますわ」
「全部納品しちゃいますか？」
「そうだな、そのほうがいいだろう」
冒険者たちの視線をまったく気にすることなく、Sランクの掲示板を見るエアハルトさんたち。
周囲はその掲示板の前にいる私たちに驚いて、騒めいている。
なにに驚いているのか不思議だったんだけど……

そろそろ八時になるというのにこんなにたくさん依頼が残っているってことは、Sランクの冒険者がいないか、いたとしても狩る手段や術がないんだろうと、エアハルトさんたちが小さな声で話している。

数種類の依頼票を剥がしたエアハルトさんが、代表でカウンターに持っていく。

なにかを話したエアハルトさんに対して、受付のお兄さんが驚いた顔をしてすぐに立ち上がると、カウンターから出てきた。

「こちらになります」

「ありがとう。移動するぞ」

エアハルトさんに促され、お兄さんのあとをついていく。

連れて行かれた先は、見た目は比較的大きな小屋だったけど、馬車と同じように拡張されているのか、中に入ったら体育館並みに広かった。

そのことにあんぐりと口を開けつつあとをついていく。

すると、受付のお兄さんが声を張り上げた。

「おーい、ラウ爺！　大型の解体依頼だ！　頼む！」

「おう！」

受付のお兄さんの呼びかけにラウ爺と呼ばれた人が返事を返した。

奥のほうにいた集団の中から男性が一人歩いてくる。

筋骨隆々で、ところどころ白髪が交じっている男性だ。ゴルドさんのように髭が長いから、ドワーフ族なのかも。

爺と呼ばれているものの、どう見てもおじいさんには見えない。どちらかといえばおじさんの部類に入ると思う。

そんなことを考えていると、私たちの元にその人が到着した。受付のお兄さんに紹介されたあと、改めてお互いに挨拶。

「ラウレントという。解体を専門にしている」

「『フライハイト』のリーダー、エアハルトだ」

二人はガッチリと握手していた。

そして、受付のお兄さんから渡された依頼票を見て、目を丸くして驚くラウレントさん。

納品するものをここに出してほしいとテーブルを指定されたので、マジックバックから種類を分けて取り出す。

それはエアハルトさんたちも同じで、それぞれ種類ごとに分けて出している。

その数の多さはもちろんのこと、あまり傷がない状態だったからなのか、ラウレントさんに唖然とされた。

立ち読みサンプルはここまで

だけど、すぐに我に返って奥にいた人たちを呼ぶラウレントさん。
その声を聞いて、人々がたくさん集まってきた。
解体する職員だそうだ。
「おお～！　こんなに綺麗なのは初めてじゃね？」
「だよね～！　これは腕が鳴るわね！」
「血もまるまる残ってるじゃないか！　おい、バケツをたくさん用意しろ！」
「瓶や皮の袋もだよ！　レッサードラゴンの素材はそっちにお願いね！」
ラウレントさんともう一人、女性が指示を出していく。
女性の頭には茶色い尖った耳が生えており、お尻には先端が白くなっている茶色のふっさふさな尻尾も。
もしかしたらキツネの獣人さんなのかも。
職員たちはテーブルの周囲に集まって興奮した様子で騒いでいたのに、ラウレントさんと女性が指示を出すと蜘蛛の子を散らしたように移動したあと、バケツや皮袋、瓶などを大量に用意し始めたからは驚いた。
「よし、ここからは時間との勝負だ。特にレッサーの素材は医師が欲しがってたから、丁寧に頼む」

「「了解です！」」
その号令を皮切りに職員たちが動き出す。
レッサードラゴンとワイバーンは四人一組、サンダーバードは三人一組のチームとなり、一組一体で解体していく。
役割を分担しているようで、解体スピードが尋常じゃなく速い！
さすがプロだと感心しきりだ。
十メートル近いワイバーンやレッサードラゴンを二十分足らずで解体し終わったときには、四人全員で唖然とした。
「作業スピードが速いな」
「ワイバーンとレッサードラゴンは、痛むのが早いんだ。それもあって、解体の速さが命なんだ」
エアハルトさんのつぶやきに、ラウレントさんが返事を返す。
「そうなのか、それは知らなかった。ああ、あと、ワイバーンとレッサードラゴンの肉だが、一体分ずつこっちに欲しいんだがどうだろうか？」
「残りの肉と素材はこっちにくれるんだろ？」
「ああ」